中近世における宗教運動と
メディア・世界認識・社会統合

文部科学省 科学研究費助成事業
学術変革領域研究(B)2020〜2022年度

ReMo(リモ)研ニューズレター

02

2023.03

文部科学省 科学研究費助成事業
学術変革領域研究(B)2020〜2022年度

中近世における宗教運動と
メディア・世界認識・社会統合

ReMo研 ニューズレター

2023.03 02

contents

目次・巻頭言 …… 1
領域概要・研究組織 …… 3
2022年度の活動 …… 5
海外体験記 …… 13
2022年度業績一覧 …… 17

巻頭言

このたびは、学術変革領域研究（B）「中近世における宗教運動とメディア・世界認識・社会統合」（ReMo研）のニューズレター第2号を手に取ってくださりありがとうございます。このニューズレターは、ReMo研のコンセプトと活動をわかりやすく伝えるために作成しています。以下お目通しいただき、感想・意見をお寄せいただければ幸いです。

第1号の挨拶文で私は、本プロジェクトはイニスやマクルーハンといったメディア史の泰斗からヒントを得つつ、メディア史をこれまでとは異なる角度から刷新するものだ、ということを書きました。そこでの共通の研究対象は、宗教の超越的な力への指向に基づき発揮される想像／創造力のありよう、そしてこの想像／創造力によって形作られるメディアとその効果です。中世メディアが宗教的価値観によって創造性を獲得していたことは、12世紀初頭にテオフィルス・プレスビテルが書いた3巻本の『諸技芸教程 Schedula diversarum artium』が教えてくれます。中世盛期の彩飾や金・ガラス細工などの技術を詳らかにする本書の序文で、テオフィルスは個人的な名誉欲とは無縁であり、「神の名が褒め称えられる」ことを意図してこの書物を仕上げたのだと強調しました。当時は修道制の改革運動の真っ只中で、シトー会士クレルヴォーのベルナールを筆頭に凝った図像表現を否定する見解が広まっていたのですが、ここで彼はむしろ神の超越性を示すためにも職人の熟練した技術を書物としてまとめ、これを普及させる必要があると確信していたわけです。もちろん個人的な名誉欲が完全になかったとは思いませんが、それでも多種多様な図像表現が生み出され、工夫を凝らした写本によって、過去の作品が新たな思想と意匠をともなってリヴァイヴァルしたのは強い宗教的動機に突き動かされていたからでした。フォン・デア・ハイデは『写本の文化誌』（白水社、2017年）のなかで、「テオフィルスにとって職人（…）は神の御業を追創造する存在で、その作品は目に見える説教なのだ」と指摘しています。周知のとおり、説教技術が飛躍的に向上するのは13世紀を待たなければなりません。技術の未発達ゆえに、創意工夫により新たな「説教」メディアが作り出されたのだとすれば、単純な発展段階論がとても危険だということに容易に気づくでしょう。ここにこそ、人類史としてのメディアの歴史を紐解く意義があるのではないでしょうか。

ReMo研のこの1年を振り返ると、まず世界的なコロナ禍の沈静化によって渡航が容易になり、ようやく海外での活動に取り組めるようになりました。国際中世学会でのセッション（p. 10）や、グローバルなネットワークへの新規参画（p. 9）がその成果です。本号で特集した「海外体験記」は、メンバーがこうした新しい状況下で、色々な問題に直面しながら海外で研究活動に邁進したことを伝えてくれるでしょう。同様に本年度は多くの制限が緩和され、国内で対面の学術会議を開催するハードルも下がりました。2023年1月に実施した熱海ワークショップ（pp. 5-8）では、はじめてメンバーのほぼ全員が一堂に会し、報告と議論をともにすることができました。ReMo研の目的の一つにキリスト教修道制と中世日本の寺社を比較しそれぞれの特徴を明らかにすることがあるわけですが、日本史と西洋史のあいだに横たわる目に見えない溝を埋めるのに、オンラインではどうしても限界があるというのが正直なところでした。今回の熱海ワークショップで――いまさらではありますが――ようやく相互理解のための第一歩を踏み出せたように思います。

ReMo研の2年半にわたる活動は、歴史学・美術史・文学の3つのアプローチによって、それまで個別になされてきた研究を架橋するものでした。また、研究者間の相互理解が深まることは個別研究の内容を見直す契機ともなり、プロジェクトとしてこうした好循環をうまく生み出せているものと確信しています。とはいうものの、2020年10月にコロナ禍とともにスタートしたReMo研は、計画の変更を余儀なくされたこともあり、いくつかやり残したことがあります。そのため2023年度も活動を続け、具体的には国際シンポジウムと研究会の開催、そして英語および日本語での論文集の刊行に取り組むことを決めました。詳細はウェブサイトでの告知をお待ちください。

エルベ川沿いの丘陵地帯「ザクセンのスイス」にて

中近世における宗教運動とメディア・世界認識・社会統合
領域代表

東京都立大学 人文社会学部
大貫 俊夫

領域概要

領域について

本プロジェクトは、中世・近世のヨーロッパ、アメリカ大陸、日本におけるキリスト教修道制、そして中世日本の寺社を研究対象とし、修道士、仏僧および神職がメディアを創出・活用し、文化・思想的な革新運動を展開したことについて、文化圏横断型の比較研究をするものである。

歴史学とその隣接諸分野の成果を見渡すと、修道士たちは修道戒律、説教などの文書のほか、文学作品、彩飾写本、聖堂装飾、あるいは巡礼などの仕組みも含め、多種多様な形態のメディアを駆使して自らの宗教理念を発信していたことが分かる。しかし、こうした努力がいかに社会を統合・規律化し、あるいはまた社会に持続性と弾力性を与えてきたかについては、より体系的な研究が求められる。

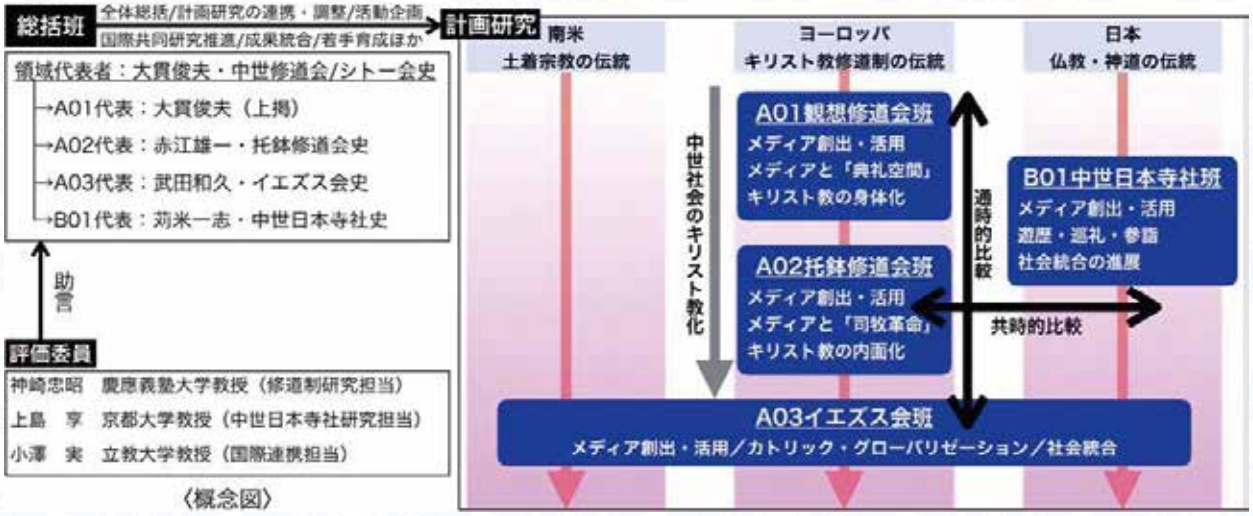
修道士や仏僧および神職は、宗教的超越を指向しつつ、司牧／教化を通じた社会変革への意思と行動力によって多種多様なメディアを創造し、社会に対して革新的な世界認識と仕組みをもたらし、社会の持続的発展に貢献したのではないか。こうした現象を異なる宗教文化のあいだで共時的・通時的に比較することで、各々の個性がきわだち、より広い視野から宗教運動と当該社会とのあいだのダイナミックな影響関係が明らかになるのではないか。本研究領域は、この観点を4つの計画研究班で共有し、各計画研究班は以下の3つの目的を達成して宗教運動の文明史的な意義を体系的に明らかにする。

1. 中近世において宗教運動を先導した人々は、宗教共同体の内外でコミュニケーションを促進するために、いかなるメディア（媒介物=文字テクスト、図像、仕組みなど）を創出し普及させたのかを明らかにする。
2. 宗教者は、1. のメディアを通じてどのような言説を宗教共同体の内外に向けて発信し、またどのような価値観と世界認識の仕方を新たにもたらしたのかを明らかにする。
3. そして最後に、宗教者は1. と2. を通していかに社会の教化を推進し、社会を統合し、文明に変動をもたらしたのかを明らかにする。

本研究領域は、単なる比較宗教史研究の延長ではない。宗教運動が世俗社会と緊張関係を持ちつつ、その持続的発展にどのように関わっていたのか、というより大きな枠組みにアプローチするものである。こうした取組みにより、宗教運動を社会のなかで実践・継承される英知ととらえ直し、その文明史的意義を総合的に明らかにする、そうした新しい学術領域を開拓したいと考えている。

「楽園に導くドミニコ会修道士たち」フィレンツェ、サンタ・マリア・ノヴェッラ修道院回廊スペイン人大礼拝堂壁画、14世紀

研究組織



〈概念図〉

研究班メンバーリスト

A01 観想修道会班

研究代表者

大貫 俊夫（東京都立大学大学院人文科学研究科・准教授）

研究分担者

菊地 重仁（東京大学大学院人文社会系研究科・准教授）
金沢 百枝（多摩美術大学美術学部・教授）
安藤 さやか（東京藝術大学大学院美術研究科・専門研究員）
山本　潤（東京大学大学院人文社会系研究科・准教授）

研究協力者

片山 幹生（大阪公立大学大学院文学研究科都市文化研究センター・研究員）
北舘 佳史（中央大学文学部・兼任講師）
林　賢治（アルベルト・ルートヴィヒ大学フライブルク・博士課程）
三浦 麻美（東洋大学人間科学総合研究所・客員研究員）

A02 托鉢修道会班

研究代表者

赤江 雄一（慶應義塾大学文学部・教授）

研究分担者

梶原 洋一（京都産業大学文化学部・准教授）
原　基晶（東海大学文化社会学部・准教授）
駒田 亜紀子（実践女子大学文学部・教授）
荒木 文果（慶應義塾大学理工学部・准教授）

研究協力者

白川 太郎（早稲田大学大学院／日本学術振興会）

A03 イエズス会班

研究代表者

武田 和久（明治大学政治経済学部・准教授）

研究分担者

折井 善果（慶應義塾大学法学部・教授）
平岡 隆二（京都大学人文科学研究所・准教授）
浅野 ひとみ（長崎純心大学人文学部・教授）
パトリック・シュウェマー（武蔵大学人文学部・准教授）

研究協力者

石川 博樹（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授）
岡田 正彦（天理大学人間学部・教授）
小俣ラポー日登美（京都大学白眉センター／人文科学研究所・白眉特定准教授）
アンドレス・メナチェ（京都大学大学院）

B01 日本中世寺社班

研究代表者

苅米 一志（就実大学人文科学部・教授）

研究分担者

川崎 剛志（就実大学人文科学部・教授）
佐々木 守俊（清泉女子大学文学部・教授）
守田 逸人（香川大学教育学部・教授）
服部 光真（元興寺文化財研究所・研究員）
小林　郁（皇學館大学研究開発推進センター・助教）

研究協力者

藤本　誠（慶應義塾大学文学部・准教授）
湯浅 治久（専修大学文学部・教授）
上野　進（徳島文理大学文学部・教授）
鎌倉 佐保（東京都立大学大学院人文科学研究科・教授）
千枝 大志（同朋大学仏教文化研究所・所員）

2022年度の活動

熱海ワークショップ
「ラテン・キリスト教と日本仏教における「もつれた修道制史」を目指して」を開催して

武田 和久（イエズス会班）

2023年1月7-8日の二日間にわたり、ReMo研関係者一同はワークショップ「ラテン・キリスト教と日本仏教における「もつれた修道制史」を目指して」を熱海で開催した。美しく澄み渡った青い海が会議室から一望できるほど、両日とも大変に天候に恵まれ、濃密かつ有意義な議論の場となった。

このワークショップの開催に向けて本格的に動き出したのは2022年の8月だった。ReMo研関係者は総勢30名を超える大所帯であり、2020年10年の結成以来、活動の大半はオンラインを中心とした研究会にとどまっていた。新型コロナウイルスの感染拡大の推移を注視しつつ、そろそろ対面型の研究会開催の時期ではないかと、総括班では話が出始めていた。本当に久しぶりの対面、あるいは初顔合わせとなるメンバーも少なくないことから、この対面型の研究会は泊まり込みで行い、会議室を借りて相応の時間を費やして交流・議論すべきということになり、これにふさわしい場所の選定作業が始まった。日本各地に点在して暮らす関係者が比較的簡便に集える合宿型のワークショップを行える理想的な場所はないかと調査を重ねた結果、インターネット環境が整った会議室を完備し駅からも徒歩圏内であるホテルリゾーピア熱海が浮上した。その結果、このワークショップにはReMo研関係者のほぼ全員が参加した。この参加率の高さはおそらく、関係者一同がこうした対面型の交流の機会を待ち望んでいたことの証なのではないか。

本ワークショップの中核的テーマは「もつれ」(entanglement)である。その具体的内容は後述の趣旨文にあるが、主に独仏近現代史の専門家から20世紀末に提起されたこの概念は、今日の歴史学界、とりわけ西洋史の分野ではトレンドになりつつある研究視角である。そして管見の限り、修道制史研究にこの「もつれ」概念が適用されたことはない。様々な意味で実験的かつ挑戦的な試みであるものの、この「もつれ」概念を基軸に西洋史と日本史、ラテン・キリスト教と日本仏教を並置させた時にいかなる議論が展開されるのか。まさに手探り状態でワークショップの準備は進んでいった。

ワークショップではまず、関係者一同が「もつれ」に関わる情報を共有すべく、発案者の武田より「もつれとは何か?」というタイトルで発表があり、その後は総括班の代表（苅米、

大貫、赤江、武田）それぞれから研究発表が行われた。その後、観想修道会、托鉢修道会、イエズス会、日本中世寺社の班ごとでグループを設け、4つの発表に関してGoogleスライドを用いながらディスカッションを行った。その際に議論すべきテーマとなったのが（1）発展段階論的な見方を超えて「もつれた修道制史」をどのように考えることができるか、（2）4つの発表を聴き、その内容を自身の研究にひきつけて、どのように考えることができるか、（3）西洋史と日本史を比較する上での論点として、どのようなことが考えられるか、の3点である。

一日目の議論はここで終了し、続いて二日目、今度は前日の議論の内容を踏まえつつ、班を交えてのディスカッションを行った。具体的には6-7名で構成される班をA、B、C、Dと4つ設けて、班の垣根を越えて活発な議論が展開された。その後、神崎忠昭、上島享、小澤実の3人の評価委員より、二日間にわたり繰り広げられたワークショップ全体を総括いただいた。具体的には、「相互作用」や「相互影響」と呼ばずにあえて「もつれ」という用語を使うことの有効性や妥当性、「もつれ」、「もじれ」、「ねじれ」など、似たような用語それぞれの使い分けをどうするのかという問題、さらには「もつれ」という概念を上位カテゴリーとして、それに関連する下位カテゴリーを複数設けて研究を深化させていくことの意義が指摘された。

こうして本ワークショップは、今後に向けての様々な課題が浮上しつつ閉会した。これだけ多岐にわたる議論が密にできたのは、とりもなおさずこの集いを対面型で実施したからに他ならない。また今、本ワークショップを振り返って強く印象に残っているのは、「プライベートでもまた、熱海のこの会場に来てみたい」という声が参加者から寄せられたことである。素直にそう思えるほど、ワークショップ当日の熱海の海の色は青く澄んでいて美しかった。ぜひこの熱海で培った経験と人的関係を元に、今後の研究の深化に向けてこれからも邁進していきたいと思う。

2022年度の活動

趣旨文

近代歴史学は19世紀に始まるが、以来多くの歴史学者が、現存する幾多の史資料をもとに過去に起きた出来事や諸状況がいかなるものだったのか、「史実」の探求に取り組んだ。この過程で多くの事柄や事象が解明されたが、その一方で近代歴史学には、過去に起きた出来事や諸状況に特定の視角を半ば強引にあてはめてきた一面があったことは否めない。具体的には中世における観想修道会と托鉢修道会の対立的理解、近代初期のヨーロッパで勢力を拡大するプロテスタントに対峙したカトリック教会の動向について、これが「カトリック改革」と「反宗教改革」のどちらだったのかという問いかけ、中世日本の仏教界を論じる際に提起された「旧仏教」ならびに「新仏教」という枠組みなどである。こうした問題設定の前提にあるのは二項対立であり、その問題点は、研究対象を二元論的な枠踏みで分別し、一方を高く評価して他方を否定的に見なす傾向である。

過去の歴史的研究対象をきれいに二分するのはおよそ不可能で、むしろ対象は複雑に絡み合い融合していたというのが実態である。ゆえに、かかる混沌とした現実を総体としていかに描くかが歴史研究の大きな課題と言える。一見すると二項対立に見える二つの要素それぞれが一つの対象の部分的構成要素となっていることもあるだろう。諸事象を融合的かつ包括的に把握することでその総体的特質が明らかになるはずである。

過去の修道会や宗派に関して言えば、もちろん個々の団体はときに鋭く対立し、その独自性が団体に属する人物により声高に主張されたこともあったが、その一方において、団体間相互の影響、類似、協力、交流関係もあった。この両面に同時に着目することで、諸修道会ないし宗派を総体として理解できる道筋が開けるのではないか。

こうした視角は、今日脚光を浴びている「交錯する歴史」(histoire croisée) ないしは「もつれた歴史」(entangled history) に負うところが大きい。この視角は相互作用を重視するものであり、その過程で生じる諸要素の変容や浸透、能動的な包摂や再帰性、依存性や境界移動など諸事象の解明が期待される。研究対象となる歴史的要素は固定的ではなく、むしろ動態的な相互関係に基づいて定義され直されていく。本ワークショップではこうした視角を意識しつつ、観想修道会（主にシトー会）、托鉢修道会、イエズス会、日本仏教の顕密諸宗を例に、個々の修道会や宗派の本質の範疇化や概念化を志向するこれまでの研究動向を批判的に検証しつつ、中世や近世という時代区分、またキリスト教や仏教などの宗教的枠組みを超えた諸宗教団体の総体的特質の解明を目指したい。

プログラム概要

1月7日（1日目）

- 開会のあいさつ
- 基調発表：武田 和久「もつれとは何か?」
- 研究発表1：苅米 一志「日本中世の仏教をめぐる「交錯」―僧侶の活動と環境を中心に―」
- 研究発表2：大貫 俊夫「シトー会アイデンティティに関する歴史叙述と「もつれ」」
- 研究発表3：赤江 雄一「「托鉢修道会」理解に向けて」
- 研究発表4：武田 和久「「もつれ」から見るイエズス会組織原理（Formula of the Institute）と会憲（Constitutions）
  ―イグナチオ・デ・ロヨラにまつわる歴史叙述とGeorge E. Ganssの解説を踏まえて―」
- 班ごとでのディスカッション

1月8日（2日目）

- 班を交えてのディスカッション
- 全体ディスカッション
- 評価委員からの講評
- 閉会のあいさつ

2022年度の活動

Global Association for Historical Research of Monasticism (GARMon) の結成について

大貫 俊夫（観想修道会班）、武田 和久（イエズス会班）

2022年はReMo研の活動を今後グローバルに展開させるきっかけ作りの年となった。同年7月1-2日、ドイツのドレスデン工科大学の比較修道会史研究所（Forschungsstelle für vergleichende Ordensgeschichte, FOVOG（フォフォグ））にドイツ、イタリア、ベルギー、アメリカ合衆国、アルゼンチン、日本から中近世の修道会ならびに修道制史の専門家が集結、対面型会議を経て待望のグローバル・アソシエーションが結成された。この連合の名称はGlobal Association for Historical Research of Monasticism（GARMon（ガーモン））と名付けられた。このGARMonの結成については新型コロナウイルスの感染拡大以前から話し合われていたが、数年にわたる延期を経て今回ようやくの初会合となった。

ReMo研関係者のうち、大貫俊夫、赤江雄一、武田和久はその構想段階から深く関わっており、今回の会合には大貫と武田が出席、ReMo研が掲げるキリスト教修道制と日本中世寺社の比較というコンセプトを紹介し、今後の研究の方向性について説明した。

完全対面型の会合では様々な議論が密に交わされたが、中でも（1）国際シンポジウムの定期開催（2024年にイタリア、2025年に米国、2026年にドイツ）、（2）大学院生や若手研究者を対象としたサマースクールの実施、（3）同じく大学院生や若手研究者への研究滞在費の支援を進めていくことなどが決定された。また今回の会合を経てFOVOGのウェブサイト内にはGARMonの特設ページが設けられ（https://tu-dresden.de/dcpc/fovog/garmon）、ここには総勢20名近いメンバーが名を連ねている。

この会合ではまた、オンラインによる定期会合も開催していくことが定められ、その1回目の会議が2022年11月3日に開催、ReMo研関係者からは赤江雄一が出席した。この会議では2024年から2026年にかけて開催予定の国際シンポジウムの準備の進め方や、若手研究者を対象とする上記（2）や（3）のプログラムの名称や具体的運営の仕方について議論された。

今後、このグローバル・アソシエーションにReMo研は積極的に関与し、斬新な視点から修道制史研究を進めていく。こうした活動に関心のある方は連絡いただければ幸いである。

国際中世学会2022でのセッション報告

大貫 俊夫（観想修道会班）

2022年度、ReMo研はコロナ禍の情勢を注視しつつ、イギリス・リーズ大学で7月前半に開催される国際中世学会（International Medieval Congress、以下IMC）にセッションを出すことができた。IMCは、中世を対象とする学際的な学会としてもっとも規模が大きく、毎年、祝祭的な雰囲気のなかで最新の研究と志を同じくする研究者とに触れ合えるまたとない機会を提供してくれる。しかし、この学会も新型コロナ感染症の影響を被ったという点では例外ではなく、2020年はオンライン開催、2021年はハイブリッド開催になったものの対面参加は現実的でなく、2022年になってようやくコロナ以前と同様の規模・スタイルでの実施となった。IMCのコロナ対応は驚くほど迅速であり、完全ハイブリッド化のために動員した大勢のスタッフや独自のアプリケーションなど、巨大学会の面目躍如と言えよう。

本セッションは大会初日に実施された。大貫が司会を務め、川崎、三浦、荒木の順番で報告を行った。セッションと各報告の概要は以下の通りである。

Session Number: 318 , Transcending and Constructing Religious Spaces: Pilgrimage in Medieval Japan and Europe (Monday 4 July 2022, 16.30-18.00)

This session aims to deepen our understanding of the process of the formation of pilgrimage sites and routes by comparing historical traditions and iconography originating in medieval Japan and Europe. The session will consist of three papers; the first on the three-mountain complex of Kumano in medieval Japan - now a World Heritage Site; the second on the rise of the veneration of St Elisabeth and the development of a pilgrimage site in 13th century Germany; the third is related to some art works concerned with Franciscan and Dominican orders for the benefit of Jubilee Years in the late 15th century Rome and reveals that these mendicant orders had been keeping a close eye on each other's artistic movements.

川崎 剛志（日本中世寺社班）：

Image Building on Kumano Pilgrimage in Medieval Japan: Origin, History, and Geography

都から遠く隔てられた熊野に多くの人々が参詣した（参詣を切望した）のは、生身ではたどりつけるはずのない三つの浄土がそこにあると信じられていたからであり、熊野の奥にある大峯=両界曼荼羅で修行を遂げた行者が人々を熊野に導くという参詣の仕組みが信仰を堅固に支えていたことを、絵画資料を用いて述べた。報告後、熊野曼荼羅の画像中、祖師役行者の前後に鬼が描かれる点に関連して、西洋の鬼との差異が問われた。日本の鬼は多義的な存在だが、ここでは山中の制御不要な存在を象徴し、その鬼を役行者が従えたこと、また修行の同行により鬼が救済されることを示すと答えた。

三浦 麻美（観想修道会班）：

Building a Center of Pilgrimage: St. Elisabethkirche in Marburg ad the Indulgence in the Thirteenth Century Germany

13世紀ドイツの巡礼地マールブルクのザンクト・エリーザベト教会を例として、境界設定と宗教的空間の形成過程を教会建設の資金確保のため発布された贖宥状から分析した。建設者であるドイツ騎士修道会は教会建設で教皇庁の全面的支援を受ける一方、地域を管轄するマインツ大司教との関係は希薄だった。その一因として、特に女性が贖宥状に呼応した寄進により修道会との結びつきを強め、物質的存在としての教会が大司教の権威に脅威となった可能性を指摘した。質疑では聖地としての熊野との比較が問われ、既存の自然的存在である山地と人為物としての建築過程が可視化される教会の相違を指摘した。

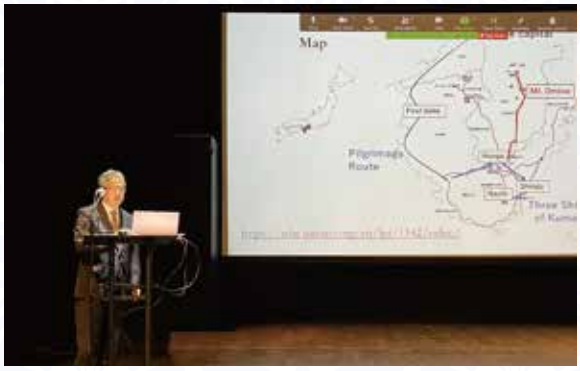
荒木 文果（托鉢修道会班）：

Franciscan and Dominican Art for the Sake of Jubilee Years in the 15th Century Rome: Illuminated Manuscripts Frescoes: Rivalry between Two Mendicant Orders

IMC 2022のテーマborderに鑑み、発表では、聖年に押し寄せる巡礼者を意識して15世紀ローマで制作されたふたつの壁画をとりあげ、二大托鉢修道会の心理的な境界がいかように視覚化されていたかについて論じた。話の中心となったのは、ローマのサント・スピリト病院の「教皇シクストゥス4世の生涯」に取材したフレスコ画連作である。発表では、本壁画の装飾写本を思わせる画面構成や繰り返し登場する教皇の肖像の存在という視覚的特異性に注目し、同様の視覚効果を狙った美術作品が、ドミニコ会のローマ市街地における活動拠点であったミネルヴァ聖堂第一廻廊に確認されることを指摘した。そのうえで、病院の壁画は、フランシスコ会士であった教皇のドミニコ会に対する競合意識を背景に誕生したものであることを新たに提言した。

会場はSTAGE ONEという小劇場のようなところで、報告後は時間一杯まで質疑が行われた。とりわけ日本史の川崎報告が興味を集め、熊野参詣がヨーロッパ中世の信仰と比較されるなかで、信仰形態がその土地の自然によって規定されたという認識が浮かび上がった。これは、本セッションを組んだひとつの目的が果たされた瞬間であった。ReMo研のコンセプトを凝縮したようなセッションを出せたことには大きな意義が見出されよう。

2022年7月の段階では、海外への渡航はなおも困難を伴うものだった。欧州の主要空港は旅客数の回復により混乱を極め、フライトのキャンセルやロストバゲージが多発していた。また、イギリスではすでにコロナは過去のもの。マスクなどの制限はおおよそ撤廃されていたが、むしろそれゆえに感染リスクは高く、日本帰国前のPCR検査で陽性だった場合は数週間の足止めを余儀なくされた。幸いReMo研からの参加者はみな感染を免れ無事帰国できたが、陰性結果を待つときの緊張感は当分忘れることはないだろう。

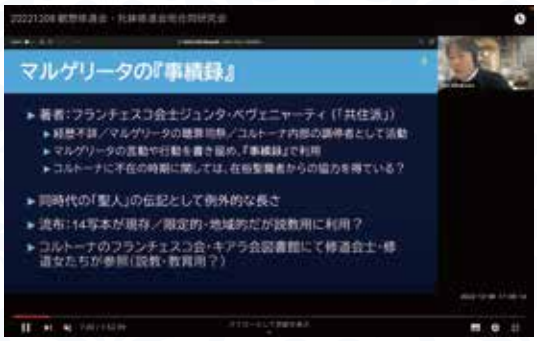


2022年度の活動

ReMo研合同研究会2022
白川 太郎（托鉢修道会班）
「14世紀フランチェスコ会における預言者表象と司牧
——マルゲリータ・ダ・コルトーナの『事績録』をめぐる問題」

2022年12月8日（木）　托鉢修道会班と観想修道会班による合同研究会　Zoomオンライン

13世紀以降のイタリア半島北中部では、同時代に生きる隠修者・贖罪者・第三会士の一部が、周囲から「聖人」とみなされるようになった。これら「新しい聖人」への崇敬を管理したのは、多くの場合に托鉢修道会士であった。修道会士たちは、典礼・説教・伝記といったメディアを通じて、「新しい聖人」の記憶を担った。ほとんどの先行研究は、こうした活動を自立的な聖人崇敬の統制と捉え、修道会士が作成する伝記を、彼らのイデオロギーが反映されたプロパガンダとみなしている。それに対して本報告では、こうした「記憶の規範化」の典型例とされてきたマルゲリータ・ダ・コルトーナの『事績録』（14世紀初頭に成立）を分析し、このテキストがフランチェスコ会士たちに向けられた多くのメッセージを含んでいたことを指摘し、その内容を同時代の文脈に沿って検討した。



各班研究会

観想修道会班

合同研究会2022を実施した（上記参照）。それ以外は各自の研究を進めることを最優先とし、2023年度には研究会を月に1回のペースで実施する予定である。

托鉢修道会班

2022年度に実施した托鉢修道会班の研究会は次の通りである。

●第1回研究会 2022年12月8日（木）

観想修道会との合同研究会　Zoomオンライン（上記参照）

●第2回研究会　2023年3月8日（水）

慶應義塾大学三田キャンパス＋Zoomオンライン

駒田 亜紀子「13世紀パリにおける彩飾写本レパートリーの多様化と托鉢修道会」

パリでは、13世紀を通じ、彩飾写本のレパートリーの多様化が進む。小型1巻本聖書と複数巻構成の註解付聖書の普及、13世紀第3四半期の法学書や自然哲学書の台頭、そして聖書や法学書の俗語（仏語）訳の出現である。これらの変容には托鉢修道会の関与が推測されるものの、現存写本からそれを直接に裏付けることは容易ではない。研究会では、美術史学的コンテクストの中で論じられてきたこれらの写本作品を、托鉢修道会史の見地から、多角的に検討する。

イエズス会班

2022年度に実施したイエズス会班の研究会は次の通りである。なお第1回については、来日中のFiona Karcz氏に特別にお願いして開催の運びとなった。

●第1回研究会　2022年10月21日（金）　Zoomオンライン

Fiona Karcz, "The Japanese Jesuit Mission Press (1590-1614): Actors and Networks"

The Tenshō embassy (1582-1590), sent to Europe by Jesuit Alessandro Valignano, brought back a movable-type printing press to Japan. After two stops in Goa and Macau and the production of three Latin texts, the printing press arrived in Western Kyushu in July 1590. Over the course of two decades, dozens of titles were produced. This presentation focused on the first two typographs of the Jesuit Mission Press: Japanese dōjuku Constantino Dourado and Italian Jesuit Giovanni Battista Pesce. Examining their connections to other individuals shed light on the importance of human networks, since they allowed printing knowledge circulation between Europe and Asia at the turn of the 16th and 17th centuries. Consequently, this research addresses connections between individuals involved in the printing activity to better investigate how they influenced the circulation and transformation of printing knowledge at different scales (local, regional and global).

●第2回研究会　2022年11月19日（土）　Zoomオンライン

武田 和久「イエズス会の組織原理に関する試論—「もつれ」の視点から—」

本発表では、イエズス会を組織として成り立たせる二つの基本文書、Formula of the Instituteと会憲（Constitutions）が成立するにあたり、会の創始者イグナチオ・デ・ロヨラが中世発足の諸修道会により定められた諸規定や組織原理を参照し、またそうした情報を丹

念に調べたロヨラの同僚フアン・アルフォンソ・デ・ポランコの手腕がいかんなく発揮されていたことを論じ、いうなれば過去から受け継がれきた諸要素が「もつれた」状態として二つの基本文書に盛り込まれていたことを指摘した。

●第3回研究会　2022年12月22日（木） Zoomオンライン

平岡 隆二「イエズス会日本布教と宇宙論−新出写本『スヘラの抜書』を中心に−」

本発表では、イエズス会の日本語宇宙論教科書『スヘラの抜書』（ペドロ・モレホン択編。16世紀末〜17世紀頭頃成立）の内容と背景について分析した。同書は近年ドイツのヘルツォーク・アウグスト図書館で発見されたイエズス会『要綱Compendia』日本語写本に収録されるもので、近世日本への西洋科学伝来について多くの新事実を明らかにする重要著作である。本発表では以下の諸点を中心に考察した。すなわち、1）概要、2）翻訳について、3）ラテン語版『天球論』との異同、4）改訂日本語版『二儀略説』との異同、5）後代における利用と影響である。

折井 善果「近世初期日本における倫理神学者マルティン・デ・アスピルクエタ」

本邦では『ナバルスのざんげ』の名で知られる、16世紀スペイン（ナバーラ）出身の倫理神学者マルティン・デ・アスピルクエタ（Martín de Azpilcueta, 1491-1586）を原著とする、告解のためのマニュアル『ナバーロの提要Compendium Manualis Navarri』（1597年）は、マニラの聖トマス大学図書館に唯一存在することが知られる。すでに全文がネット上で公開されているが、同書についての本格的な研究は未だ存在しない。本発表は、この版の作成に使用された原典が、1592年アントワープJoannes Bellerus（Jean Bellere）で出版された、イエズス会士ピエトロ・アラゴナの同名の著作である可能性を検証した。

●第4回研究会　2023年1月27日（金） Zoomオンライン

浅野 ひとみ「キリシタン信仰具研究―苦行鞭を中心に―」

16-17世紀、西欧では、ペストの脅威を前に、プロセッションで街中を練り歩く鞭打ち行が行われるとともに、「新しい敬虔」によって広まった家内での個人的鞭打ち行が併存していた。ザビエルがもたらし、その後も市来の信仰集団の維持に大きな役割を果たした短い苦行鞭は「霊操」実践のための道具でもあった。大友宗麟らの感化によって、豊後では鞭打ちが盛んになり、女性までプロセッションに参加した記録が残っている。この習慣は平戸にも伝わり、苦行鞭は性格を変えながらも、生月のカクレキリシタンたちの信仰具として現存する。一方、長いタイプの鞭は、スペインのフランチェスコ会系のものと推定され、支倉常長将来品などが僅かに現存するが、流布した形跡は無い。

パトリック・シュウェマー「排耶物語『喜利志祖仮名書』に見られるイスラム制服、十字軍」

1640年代に集められた雪窓宗崔文書の中には、排耶物語として最古で最長の現存例『喜利志祖仮名書』がある。執筆中であるその英訳・注釈から、他の排耶物語と違ってヨーロッパ事情への正確で詳しい知識、当時は隠れユダヤ人、モリスコ、プロテスタントが述べそうなキリスト教会批判、ヨーロッパ暗黒史が伝えられているという点を指摘する。独特な方言などから、奥書で指名されている千々和ミゲルだけではなく、マニラなどで貿易商人の家内奴隷として勤めてきた多くの帰国者が宗門改役によって尋問され、情報筋となったと推測する。

日本中世寺社班

日本中世寺社班では、研究報告として下記の二回を開催することができた。各回の報告要旨は以下の通りである。

●第1回研究会　2022年6月26日（日） Zoomオンライン

湯浅 治久氏「中世武士団の統治と宗教」

本報告は、筆者が展示プロジェクト委員として構想から関与した、国立歴史民俗博物館の企画展示「中世武士団―地域に生きた武家の領主」（2022年3月15日〜5月8日）の図録に寄稿した成果をもとに、鎌倉時代の武士団研究の現在を、その統治と宗教の観点から素描したものである。村や町が成熟し、近世に傾斜する以前の鎌倉時代の武士団は、日本的「家」の成立以前の未成熟な同族形態をもち、また流動性の高い地域社会にあって、自己完結的な領域支配よりも、広域に散在する所領の経営に、分裂をはらむ武士団結合の分業によって臨んでいた段階にあった。そこにおいて神祇信仰や仏教などの宗教は、民衆願望の実現と抑圧のシステムを併せ持つ両義的な性格をもっており、武士団の統治の不安定性を補完する機能を果たしていた。こうしたことを、巨大な東国武士団の典型である下総国千葉氏の列島各地における統治の実態と、日蓮宗という鎌倉仏教の関与を主な素材として、論じたものである。

●第2回研究会　2022年7月29日（金） Zoomオンライン

藤本 誠氏「古代地方寺院の性格と機能」

古代日本の地方寺院については、通説的には、古代の血縁や出自・系譜を同じくする集団・組織である「氏」の祖先信仰の場=〈氏寺〉として位置づけられ、古代を通じて氏の紐帯的機能をもつとされてきた。ところが近年では、「氏寺」という表現は平安初期から見えることに加え、諸氏族が結縁して建立した〈知識寺院〉が存在したとする見解が提起されている。そこで本報告では、地方寺院の性格と機能についての再検討を試みた。まず霊亀2年（716）5月の寺院併合令の分析から、国家側からみた地方寺院には、A複数の氏族が関与する寺院と、B一氏族に代々継承される寺院という二類型が存在したことを指摘した。つぎに、河内国の西琳寺を中心に、伊勢国の多度神宮寺、肥後国の浄水寺などの事例について検討を加え、複数氏族による関与を確認し、上記のA類型は地方寺院の一般的な存在形態であったことを明らかにした。また地方寺院の住僧の存在形態についても検討し、地方寺院には檀越以外の出身氏族の住僧が多く存在し、B類型の寺院であっても、住僧という点では複数氏族が関与していたことを指摘した。地方寺院における仏教法会は、五穀豊穣や諸氏族の祖霊追善と密接に結びついた地域全体の利益と関わる機能を有していることから、総じて地方寺院は、地域社会における諸氏族を社会的・宗教的に統括し、地域秩序の形成・維持のために建立されたと考えられることを示した。

この他、2023年1月7日・8日総会の日程確認などのため、第3回研究会（打ち合わせ会）を2022年12月27日（火）に開催した。

海外体験記

金沢 百枝（観想修道会班）
「シトー会聖堂にはほんとうに「装飾」がないのか」（フランス）

2022年秋、フランスを2週間ほど旅した。疫禍のため、学務の間をぬって気軽に行ける状況ではなかったので、じつに3年ぶりのヨーロッパだった。研究対象を実地に見たり調べたりできないもどかしさにストレスを抱えていただけに、パリの町を歩くだけで解放される気がした。火災で屋根が焼け落ちたノートルダム大聖堂はまだ工事中で仮囲いのためなかのようすはまったく見えない。にもかかわらず、火に包まれたゴシック大聖堂が印象的だったからか、以前よりも観光客が集まっているように見えた。

今回の旅は、ローヌ川周辺のロマネスク建築の実地調査が主なる目的だったが、コロナ禍の空港事情が悪く、スーツケースの紛失が多発していると聞いたので、パリへは直行便を選んだ。乗り換えがなければ紛失の可能性も減るに違いないと安全策をとった。もう一つの理由は、2015年に改装のため閉館していた国立中世博物館、通称クリュニー美術館が2022年5月にリニューアル・オープンしたので、どうしても見ておきたかったからだ。古代ローマ時代の浴場跡とクリュニー修道院長の館をじつにうまく統合し、美術館としての展示もわかりやすくなっていた。閉館中に新規購入した所蔵品の展示も最後の部屋にある。以前よりも整然とした印象を受けた。10月も最後の週だというのに、諸聖人の祝祭日のヴァカンスのためか、あるいはたんに土曜だったからか人出が多く、また世界中から人が集まっているようでさまざまな言語が耳に入ってくる。マスクをしている人は誰ひとりとしていない。人混みに息苦しさを感じて、予定よりも早くリヨンへのTGVに乗った。

リヨンとその周辺は、中世においても早くからキリスト教化が進んだ地域として知られている。アルルからリヨンまでは、ローヌ川の流れに乗って便が良かったのだろう。古代ローマ時代からガリアの大動脈として発展し、遺跡の多い地域でもある。そのローヌ川を挟んで西側には中央高地があり、東側にはアルプスが聳える。リヨンからローヌ川に沿って少しずつ南下しながら、川の両側にあるロマネスク聖堂を見る算段である。

本科研との関わりで言えば、改めて修道会によって美術や建築に差があるのかを確かめてみたかった。尋ねた聖堂の多くは山間にある教区教会の聖堂だが、ベネディクト会とシトー会、クリュニー会の修道院建築とその美術を比較することができた。クレルヴォーのベルナルドゥスの言説から、シトー会は修道院の建築に装飾を施さないことで知られているが、「装飾」というのをどのようなものと捉えるのか、新たな疑問が生じた。確かに物語場面や動物、人物像などはほとんど刻まれていないものの（例外はあってシルヴァカンヌには人の顔の彫刻があった）、近隣にある同時期のごく質素な礼拝堂と比較するとわかるとおり、精緻な切石で石造天井の構造は独創的で、柱頭彫刻も植物文様に溢れている。古代ローマ建築の影響が強いこの地域では、古代の柱頭に基づいた植物文様を基調にしていることが多く、動物や人物が刻まれていない教区教会も多い。つまり、シトー会の装飾はロマネスク建築装飾のレパートリーの範疇にあり、けっして「装飾がない」とはいえないのではないかという問題意識が芽生えた。今後の研究に繋げたい。

片山 幹生（観想修道会班）
「オーバーアマガウ受難劇での受難」（ドイツ）

オーバーアマガウ受難劇は、世界有数の規模と古い歴史を持つ地域共同体演劇である。1634年以来、10年ごとに上演されるこの受難劇の公演には、オーバーアマガウ住民のほぼ半数にあたる約2000人が関わり、5月から9月末までの約100回の公演には世界各地から約50万人の観客がやって来る。2017年以来、日本の地域素人演劇の研究を行っている私としては、海外の地域素人演劇の代表例としてオーバーアマガウ受難劇には強い関心を持っていた。また中世演劇の研究者の立場からも、中世の町の広場で住民たちによって上演された大規模な聖史劇・受難劇のエートスを引き継ぎ、現在まで続くオーバーアマガウ受難劇は、一度は見ておきたい演劇だった。

新型コロナ禍の影響で本来なら2020年だったオーバーアマガウ受難劇の公演年が、2年延期され2022年になった。2021年度に新たに私を代表者として科研の基盤（B）に採択された地域素人演劇研究の予算を利用してオーバーアマガウ受難劇を見に行くことに決めた。私以外にこのグループ研究のメンバーである英米演劇研究者のMさんもオーバーアマガウ受難劇を見に行くことになった。私が海外に行くのは2020年の3月以来、2年半ぶりのことだった。私もMさんもドイツ語ができないし、土地鑑もないので、10年以上前からベルリンに住み、演劇関係のコーディネーターや通訳をしている方と連絡をとり、現地でのアテンドを依頼した。スケジュールを調整して、夏休み中の8月上旬にドイツに行くことになった。まず観劇のチケットの手配である。チケット予約はオーバーアマガウ受難劇のサイトでできる。5月上旬に予約したが、座席は十分残っていた。ちょっと迷ったすえ、私は上から二番目のカテゴリーの134€のチケットを予約した。次いで航空券を予約。ドバイ経由、エ

ミレーツ航空で往復20万円強だった。燃料サーチャージの高騰のため、例年よりかなり高い。問題なのは宿の確保である。受難劇上演期間中は、オーバーアマガウのホテルはほぼ満員で、われわれの予算では宿泊できない超高額な宿しか残っていない。Mさんが現地でレンタカーを運転してもいいというので、オーバーアマガウから20キロほど南にあるガルミッシュ＝パルテンキルヘンの宿を予約することにした。

オーバーアマガウ受難劇観劇の前日の昼にミュンヘン空港で待ち合わせ、そこからレンタカーで南に120キロほどのところにあるガルミッシュ ＝パルテンキルヘンへ向かった。ガルミッシュ ＝パルテンキルヘンの中心街で夕食を取り、そこから2キロほど上った高台にある宿に向かおうとしていたとき、ガクンガクンという大きな衝撃があった。とがった縁石にタイヤが接触して、右側のタイヤが二本ともパンクしてしまったのだ。24時間対応のはずのレンタカー会社の緊急番号に電話したが、なぜか留守番電話での応答でオペレーターが電話口に出ない。宿はここから2キロ、そして翌日の午後には20キロ離れたオーバーアマガウまで行かなければならないのに、車が動かなければどうしようもない。ガルミッシュ ＝パルテンキルヘンは山中の田舎町ゆえ、タクシーの台数も少なく、Google検索で出てきたタクシー運転手に片端から電話したのだが、どこも「予約が一杯でどうしようもない」という返事だった。パンクで車は動かない。タクシーはない。いったいどうすればいいんだ。明日、オーバーアマガウまで行けないとなると、私は何のために高い航空券を買ってドイツに来たのかがわからなくなる。絶望的な気分になった。われわれはガルミッシュ ＝パルテンキルヘンの町外れで絶体絶命のピンチに陥ってしまったのだった。（以下次号に続く）

海外体験記

荒木 文果（托鉢修道会班）
「ダリア・ボルゲーゼ賞の授賞式」（イタリア）

このたび、自著 Le cappelle Bufalini e Carafa: Dall' odio dottrinale e cultuale tra domenicani e francescani alle rivalità artistiche（Campisano Editore, 2019）が、第61回ダリア・ボルゲーゼ賞に選ばれ、2022年5月7日にローマのボルゲーゼ宮殿で開催された授賞式に出席しました。1965年に設立されたこの伝統ある賞は、ローマに関する学術的功績をあげた外国人を毎年ひとり選出してきました。アジア圏からの受賞は今回がはじめてです。過去の受賞者は国際的に非常に高く評価されている先生方ばかりで、受賞の報をうけた際は、喜びもつかの間、畏れ多さの方が強く感じられ、自然と背筋の伸びる思いがしました。産休育休後にコロナ禍となり、実に4年ぶりとなったローマ滞在では、旧交を温めたほか、新しい出会いの数々に恵まれ、自分の研究者人生が新しい局面を迎えたことを意識する機会となりました。

とはいえ、海外渡航にはたいへんな困難を伴いました。航空券は、変更やキャンセルが相次ぎ、出発2週間前にまだ一部の便がとれていませんでした。航空会社に渡航理由を伝えたうえで確保できたのは、フランクフルト経由ローマ行きの深夜便。ウクライナ危機による飛行制限のためにウィーンでの給油をはさむ合計23時間のフライトでした。2歳のこどもと1週間以上も離れることや世界情勢が安定しないなかでの長距離フライトへの不安を抱えながらの鬱々とした出発でしたが、離陸するやいなや開放感と期待に胸が高鳴りました。そして、久しぶり訪れたローマは以前と変わらず、壮麗な街並みに喧騒が響きわっていたのです。

パンデミックの影響で授賞式が2年間中止されたために、今年の催しは例年以上に特別なものであったようです。式に彩りを添えるべく準備した着物を、ボルゲーゼ家の方々をはじめ、みなさんが大変喜んでくださり、自著の内容だけでなく、日本にはローマの研究に身を捧げる研究者が多くいることに興味深く耳を傾けてくださいました。

過去の受賞者の名が示しているように、西洋に関する研究は、ラテン語由来の言語を話す研究者たちが花形で、わたしのように日本で生まれ育った者には、「ガラスの天井」があるような感覚でした。このたびの受賞はそのガラスを突き破った、とまでは言えないものの、小さなヒビをいれることができたかも知れません。自著で提示したブファリーニ礼拝堂壁画とカラファ礼拝堂壁画の関連性は、まさに盲点であったとして、特にイタリアで評価されましたが、それは日本人である執筆者が欧米の美術史教育から若干距離のある場所で研究の基礎を築いたという背景が少なからず影響しているようにも思われます。その意味で今回の経験は、西洋美術史研究に日本人として参画する意味を改めて自覚するきっかけにもなりました。

ダリア・ボルゲーゼ賞は、ご指導いただいた先生方、切磋琢磨してきた研究仲間たち、プライベートを支えてくれた家族や友人たちとともに得たものです。お力添えいただいたみなさまに心からの感謝を申し上げます。今後も賞の名に恥じぬよう、地道に謙虚に教育・研究活動に邁進し、美術史という豊かな学問の世界をめぐる旅を続けていきたいと思います。

折井 善果（イエズス会班）
「コロナ禍を越えて―シンポジウム開催記inライプツィヒ―」（ドイツ）

2022年9月1日より3日間、ドイツのライプツィヒ大学人文社会科学高等研究センターにおいて、“Religion, Translation and Transnational Relations: Japan and (Counter-) Reformation Europe 宗教・翻訳・国家間関係：日本と（対抗−）宗教改革期のヨーロッパ”と題するシンポジウムを開催した。同大学のKatja Triplett氏、オックスフォード大学のPia Jolliffe氏、そして折井がオーガナイズを担当した。本邦においては「日本キリシタン史」の名で知られる中近世後期〜近世初期日本キリスト教史に、国語史、科学史、宗教史、美術史をはじめ様々なディシプリンから関連する12名の研究者が世界中から集い、40名を超えるオンライン参加者も交えた活発な議論が戦わされた。ライプツィヒにほど近いヴォルフェンビュッテルのヘルツォーク・アウグスト図書館（Herzog August Bibliothek）で近年存在が確認されたキリシタン関係写本・刊本の調査や、ライプツィヒ市内のグラッシ美術館における、米ボストンカレッジ・リッチ研究所所長のAntoni Ucerler氏の公開レクチャーなど、3人で「できたらいいよね」と話していたアイデアがみな実現したことは、本当に幸いであった。誰一人市内観光や昼寝に興じず、全ての発表に全ての登壇者が参加するシンポジウムというのは後にも先にも初めての経験であり、招聘者のお一人お一人にとっても実り多い機会であったのではないかと、胸をなでおろしている。

このシンポジウムを発案した2021年夏、新型コロナウィルスの先行きは全く不透明であった。したがって、再びロックダウンに見舞われることも想定し、当初よりハイブリッド形式を視野に入れての準備であった。結果、オンラインでの参加になったのは、日本の研究機関に所属されていて、渡航自粛の要請が続いていたお二人だけであった。会議に先立って、私は個人的にスペインとフランスの文書館でも調査をしたのだが、いずれの地も調査や研究に関しては、時折マスクを要する以外は、ほぼ通常を取り戻していた。市民生活のレベルでも、すでに感染者の全数把握は終わっているようで、3ユーロ程度で市販されている検査キットで自己管理せよ、というステージに移行していた。

一方、日本では、2022年9月になっても帰国時のPCR陰性証明書の提出は続いていたため、日本からの参加組は、会議の合間を縫って、証明書の取得に奔走するはめになった。ライプツィヒ市はあまりにも機動的で、PCR検査場は感染者の減少に因んで順次閉鎖されていくようで、まだ開設しているクリニックを探して、ライプツィヒの街をどれだけ駆けずり回ったことだろうか。各国でウィルス蔓延の程度は異なるので一概に批判するつもりはないが、会議でロビートークの時間を逃すというのはある意味致命的なことでもある。こういった積み重ねで、日本の研究全般が被った知的損失というのは一体どれくらいになるのだろうか、とつい考えてしまった。

「近世は翻訳によって成立した」というテーゼをめぐって議論された本シンポジウムの内容は、オーガナイザー3名を編著者として徹底的に再構成し、2024年度中に出版の予定である。「日本キリシタン史」の発展形を世に問うことができればと意気込んでいる。

2022年度業績一覧

A01 観想修道会班

● 論文

片山　幹生（単著）：「文学的寓意としての中世ハープ―ギヨーム・ド・マショー『ハープの賦（ディ）』読解」『Études Françaises』30（2023年）、印刷中
北舘　佳史（単著）：「12世紀末のフォンテーヌ・レ・ブランシュ修道院の歴史叙述―共同体の過去の再構成と財産の保護―」『人文研紀要』（中央大学人文科学研究所）101（2022）、1-28頁
：「『オバジーヌの聖エティエンヌ伝』試訳（四）」『紀要』（中央大学文学部）291（2022）、113-137頁
林　　賢治（単著）：「12世紀の修道院における両性の共存と書物管理の様相：ギルバート会の綱要に現れる対称と非対称」、『歴史学研究』1029（2022年11月）、50-58頁
三浦　麻美（単著）：「幻視者の誕生ー中世盛期ヘルフタ修道院に見る学問と回心ー」『西洋史研究』第51号、27-47頁
山本　　潤（単著）：Historizität der mittelhochdeutschen Heldendichtung – Eine Analyse aus der Perspektive des historiographischen Geschichtsverständnisses, *Neue Beiträge zur Germanistik*, Nr. 165、印刷中

●書籍

片山　幹生（共著）：『新版　キリスト教大事典』（教文館）、2023年刊行予定（担当：「キリスト教演劇」「受難劇」「聖史劇」「典礼劇」）
：日本ケベック学会編『ケベックを知るための55章【第2版】』（明石書店）、2023年刊行予定（担当：「ケベックのシャンソン」）
金沢　百枝（監修）：スザンナ・イヴァニッチ著／岩井木綿子訳『CATHOLICA カトリック表象大全』（東京書籍）、2022年
菊地　重仁（分担執筆）：大黒俊二／林佳世子責任編集、大月康弘／清水和裕編集協力『西アジアとヨーロッパの形成：八～一〇世紀』（岩波講座世界歴史8）岩波書店、2022年（担当：「コラム：フランク王国の法文化とテクスト」108-109頁）
：*Communicating Papal Authority in the Middle Ages*, edited by Minoru Ozawa, Thomas W. Smith and Georg Strack（Studies in Medieval History and Culture）, London: Routledge, 2023（担当："Authority at a distance: popes, their media, and their presence felt in the Frankish kingdom," pp. 13-30）.
北舘　佳史（分担執筆）：松本悠子・三浦麻美 編『歴史の中の個と共同体』（中央大学出版部）、2022年（担当：「12・13世紀のシトー会の例話集に見る逃亡者・離脱者」、83-109頁）

●研究発表・講演

安藤さやか：「コルヴァイのオットー朝期彩飾写本の装飾イニシアルと充填文様」（ポスター発表）西洋中世学会第14回大会、立教大学、2022年6月19日
：「カロリング朝期彩飾写本に於ける礼拝の視覚化――《コルビー詩編》のイニシアルを中心に――」上智史学会月例会、オンライン、2022年10月22日
大貫　俊夫：「シトー会アイデンティティに関する歴史叙述と「もつれ」」学術変革領域研究（B）ワークショップ2022「ラテンキリスト教と日本仏教における「もつれた修道制史」を目指して」、リゾーピア熱海、2023年1月7日
片山　幹生：「キリスト教演劇の世界―ヨーロッパの宗教劇とオーバーアマガウ受難劇」明治学院大学、2022年11月14日
：「『典礼劇』とは何か―中世ラテン語歌唱劇の諸相」フォンス・フローリス古楽院秋期講座2022、LM文学講座、オンライン、2023年1月8日
：「宮廷の愛と田園の恋―中世フランスの抒情詩で歌われた愛のかたち」フォンス・フローリス古楽院秋期講座2022、LM文学講座、オンライン、2023年1月15日
：「中世のフランス語劇の諸相―『アダン劇』からファルスまで」フォンス・フローリス古楽院秋期講座2022、LM文学講座、オンライン、2023年1月23日
：「オーバーアマガウ受難劇観劇報告会」MK企画、オンライン、2023年2月7日
菊地　重仁："Motivations for travels in the Carolingian age," Frühmittelalterliche Mobilität: Interdisziplinäre Zugäng / Early medieval mobility: Interdisciplinary approaches, Heidelberger Akademie der Wissenschaften, 28-30. September 2022、2022年9月28日
："Verhandlungen und Kompromisse in der Karolingerzeit," Der 1. Workshop des Projekts: Kompromisse im Mittelalter. Erkundungen eines vernachlässigten Themas, オンライン、2022年11月25日
北舘　佳史：「サヴィニーの聖人崇敬と修道院のアイデンティティ」（ポスター発表）西洋中世学会第14回大会、立教大学、2022年6月19日
林　　賢治："Die Tätigkeit des armarius im Doppelkloster（12. Jahrhundert）," Landesgeschichtliches Kolloquium des Lehrstuhls für Mittelalterliche Geschichte I, Sommersemester 2022、2022年6月14日
："Die Tätigkeit des armarius im Doppelkloster（12. Jahrhundert）," International Conference: Rethinking the Medieval Double Monastery in Interdisciplinary Perspective、2022年10月15日
："Westliche mittelalterliche Elemente in japanischen Animes," AK CRITICAL MEDIEVALISM、2022年12月1日
三浦　麻美：From Immobiles to Mobiles: The Concept of Poverty in Vita s. Elyzabeth by Theodoric of Apolda, Mysticism & Lived Experience Network Annual Conference. Charity and Poverty in the Lives Works of Medieval Mystics、オンライン、2022年6月21日
：Building a Center of Pilgrimage: St Elisabethkirche in Marburg and the Indulgence in 13th Century Germany, International Medieval Congress 2022, University of Leeds, 2022年 7月4日
：「名前のない修道女たちー神秘主義と西洋中世史からの取り組みー」東洋大学人間科学研究所「SDGsと人文学」公開セミナー、オンライン、2022年10月15日
山本　　潤：「敷居に立つニーベルンゲン―マックス・メルによる二部作『ニーベルンク族の災厄』」第5回戦後オーストリア文学コロキウム、オンライン、2022年11月19日

●短報・書評・アウトリーチなど

安藤さやか（単著）：「《ドロゴ典礼書》Sacramentaire de Drogon, Paris, Bibliothèque nationale, Ms. lat. 9428」『東京芸術大学西洋美術史研究室紀要（Aspects of Problems in Western Art History）』19（2021）、82–87頁
：「日本人が持つ『中世ドイツ』のイメージを塗り替える、世界遺産コルヴァイ修道院」『WEBアステイオン』、2022年7月11日、https://www.newsweekjapan.jp/asteion/2022/07/post-66.php（最終アクセス日：2023年2月26日）
大貫　俊夫（単著）：「『チ。―地球の運動について―』をめぐるファクトとフィクション」『ユリイカ』55-1（2022）、283-289頁
（講師）：「中世ヨーロッパのファクトとフィクション　第1回」朝日カルチャーセンター新宿教室、2022年7月12日
：「中世ヨーロッパのファクトとフィクション　第2回」朝日カルチャーセンター新宿教室、2022年8月9日
：「中世ヨーロッパのファクトとフィクション　第3回」朝日カルチャーセンター新宿教室、2022年9月13日
：「ヨーロッパの「中世」とは「暗黒時代」ではなかった?! 現代に生きる者が中世から何を見出せるかを再考する」YouTubeチャンネル「未来に残したい授業」、2022年9月26日、https://www.youtube.com/live/pbWJeUpSjt8?feature=share（最終アクセス日：2023年2月26日）
：「中世ヨーロッパのファクトとフィクション　第4回」朝日カルチャーセンター新宿教室、2022年10月11日
：「中世ヨーロッパのファクトとフィクション　第5回」朝日カルチャーセンター新宿教室、2022年11月8日
：「中世ヨーロッパのファクトとフィクション　第6回」朝日カルチャーセンター新宿教室、2022年12月13日
：「中世ヨーロッパのファクトとフィクション　第7回」朝日カルチャーセンター新宿教室、2023年1月10日
：「中世ヨーロッパのファクトとフィクション　第8回」朝日カルチャーセンター新宿教室、2023年2月14日
：「中世ヨーロッパのファクトとフィクション　第9回」朝日カルチャーセンター新宿教室、2023年3月7日
金沢　百枝（単著）：「古代ローマの遺産との「距離」～ローヌ川流域における「川のロマネスク」と「山のロマネスク」」『Art Anthropology』18号、48-51頁
（監修）：『CATHOLICA　カトリック表象大全』岩井木綿子訳、東京書籍、2023年2月
（出演）：「宇宙感動体験プロジェクトSTAR SPHERE」対談シリーズ2、SONY/JAXA/東京大学プロジェクト/江浦測候所、https://www.youtube.com/watch?v=thwoPCNdYk4&t=243s（最終アクセス日：2023年2月20日）

金沢　百枝（講師）：「キリスト教美術をたのしむ旧約編」76「洗礼」新潮社、青花講座、2022年4月8日
：「キリスト教美術をたのしむ旧約編」77「キリストの誘惑と悪魔」新潮社、青花講座、2022年5月13日
：「キリスト教美術をたのしむ旧約編」78「奇蹟」新潮社、青花講座、2022年6月16日
：「フェルメール」多摩美術大学生涯学習センター講座、2022年7月2日
：「キリスト教美術をたのしむ旧約編」79「たとえ話」新潮社、青花講座、2022年8月22日
：「キリスト教美術をたのしむ旧約編」80「バイユーとイソップ」新潮社、青花講座、2022年9月22日
：「工芸と私」62「ロマネスクと私たち：ゾディアック叢書のこと」新潮社、青花講座、2022年10月1日
：「キリスト教美術をたのしむ旧約編」81「エルサレム入城」新潮社、青花講座、2022年10月14日
：「キリスト教美術をたのしむ旧約編」82「最後の晩餐」新潮社、青花講座、2022年10月14日
：「キリスト教美術をたのしむ旧約編」83「十字架の道行き」新潮社、青花講座、2022年11月11日
：「キリスト教美術をたのしむ旧約編」84「クリスマス・スペシャル」新潮社、青花講座、2022年12月15日
：「キリスト教美術をたのしむ旧約編」85「磔刑」新潮社、青花講座、2022年1月13日
：「工芸と私」65「西洋工芸の歴史」新潮社、青花講座、2023年1月13日
（展覧会）：「ロマネスク・ノート展」新潮社・工芸青花ギャラリー 2022年6月24日～28日
菊地　重仁（単著）：「［文化交流茶話会トーク］ヨーロッパ初期中世の政治文化をめぐって：『威嚇』の様態を考える」『文化交流研究：東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』36（2023）、19-26頁
三浦　麻美（受賞）：第17回女性史学賞、奈良女子大学アジア・ジェンダー文化研究センター、2023年1月7日

A02 托鉢修道会班

●論文

荒木　文果（単著）：「Illuminated Manuscripts *Frescoed* in the 15th Century in Rome: Rivalry between Two Major Mendicant Orders」、慶應義塾大学日吉紀要『人文科学』37（2022）、37-65頁
原　　基晶（単著）：「「地獄篇」第三歌と第四歌の場面転換：書かれていない場面を読むこと」（特集ダンテ：世界文学会が21年度10月に、原を中心に開催した「ダンテ・シンポジウム「ダンテと世界文学」を活字化した特集）『世界文学』第135号、pp.1-9、世界文学会、2022年
駒田亜紀子（単著）：「『十三世紀フランス語聖書』（Bible française du XIIIe siècle）彩飾写本研究：13世紀後半におけるパリ彩飾写本市場の変容」、『実践女子大学美學美術史學』37（2023）、（1）-（11）頁
白川　太郎（単著）："Discretio, prophetia, e Chiara da Montefalco: l'attività direzionale di una santa viva." Ricerche storiche 53: 2（2023）: in corso di stampa.
："Heresy of Guglielma and Maifreda: Devotion, Politics, and Society at the End of the 13th Century Milan". Historical Studies of the Western World 2（2023）: forthcoming.
："A Waldensian Pastor Between the Confessional Myth and National Genealogy: History and Religious Reform in Emilio Comba（1839–1904）." Church History 92（2023）: forthcoming.

●書籍

赤江　雄一（共著・分担執筆）：大沼由布・徳永聡子編『旅するナラティヴ――西洋中世をめぐる移動の諸相』、知泉書館、2022年（担当：「放浪する説教者ジョン・ボール――ロラード派直前の異端」、135-151頁）
：関西学院大学キリスト教と文化研究センター編『ことばの力――キリスト教史・神学・スピリチュアリティ』キリスト新聞社, 2023年3月刊予定（担当：「揺らぐ言葉と説教者の権威――教皇ヨハネス 22 世の至福直観の教義をめぐる説教」、55-82頁）
：*Communicating Papal Authority in the Middle Ages*, ed. by Minoru Ozawa, Thomas W. Smith, Georg Strack（Routledge, 2023）（担当：'John XXII as a Wavering Preacher: The Pope's Sermons and the Norms of Preaching in the Beatific Vision Controversy', pp. 41-61）
（共訳）：ジョン・H. アーノルド『中世史とは何か』図師宣忠との共訳、岩波書店、2022年
梶原　洋一（単著）：*Du frère au maître. Les dominicains de France face au système universitaire des grades au Moyen Âge*, Paris, Cerf, 2022
駒田亜紀子（共著・分担執筆）：キリスト教文化事典編集委員会編『キリスト教文化事典』丸善出版、2022年8月　（分担：「写本」360-363頁）
白川　太郎（分担執筆）：公益信託松尾金藏記念奨学基金編『明日へ翔ぶ−人文社会学の新視点−6』風間書房、2023年刊行予定（担当：「マルゲリータ・ダ・コルトーナの『事績録』と告解の問題：後期中世イタリアにおける預言者・司牧・托鉢修道会」）

●研究発表・講演

赤江　雄一：「〈托鉢修道会〉理解に向けて――認識の「もじれ」を巡って」、Remo研熱海ワークショップ「ラテン・キリスト教と日本仏教における「もつれた修道制史」を目指して」2023年1月7日
荒木　文果："LXI Premio Daria Borghese: Le Cappelle Bufalini e Carafa", Cerimonia di consegna dei premi Daria e Livio Giuseppe Borghese per il 2022, Palazzo Borghese, 2022年5月7日
：「ダリア・ボルゲーゼ賞受賞までの道のりと今後の課題」慶應義塾大学理工学部教授・准教授就任講演会、慶應義塾大学、2022年6月9日
："Franciscan and Dominican Art for the Sake of Jubilee Years in the 15th Century Rome", International Medieval Congress, University of Leeds, 2022年7月4日
：「サンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ聖堂カラファ礼拝堂①」芸術文化教養講座、大分県立美術館、2022年9月16日
：「サンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ聖堂カラファ礼拝堂②」芸術文化教養講座、大分県立美術館、2022年10月14日
：「14、15世紀イタリアにおける『キリストの生涯の観想』の変容と二大托鉢修道会の競合意識」慶應義塾大学文学部美学美術史学科コロキウム、オンライン、2022年12月1日
：「『キリストの生涯の観想』をめぐる二大托鉢修道会のイメージ戦略」美術史学会東支部例会、オンライン、2023年1月28日
白川　太郎：「過ぎ去らない中世：近代イタリア王国の知識人による宗教史叙述と「異端者」の再発見」、西洋中世学会第14回大会 自由論題報告、立教大学（ハイブリッド開催）、2022年6月18日
原　　基晶：「ダンテ『神曲』「地獄篇 第五歌」フランチェスカの愛の歌をめぐって：新たな校訂版テクストをもとに」、国際編集文献学研究センター主催第二回シンポジウム、成城大学、2023年10月22日
：「ミュージカル『チェーザレ　破壊の創造者』事前レクチャー」、明治座、明治座、2023年1月29日
：「日本においてチェーザレ・ボルジアについて語ること」（Talking about Cesare Borgia in Japan）、国際ルネサンス学会連盟ヴァーチャル・セミナー第8セッション「ルネサンスとコミック」（Virtual Interdisciplinary Seminar 2021-238th, 8 session, <Renaissance and Comics>）、国際ルネサンス学会連盟（Fédération Internationale des Sociétés et Instituts pour l'Étude de la Renaissance）、オンライン、2023年2月3日

●短報・書評・アウトリーチなど

荒木　文果（単著）："1128 - Fumika Araki, Ringraziamenti", Bollettino del Gruppo dei Romanisti, quarta serie, V, nn. 14-15（2022）、14-15頁
：「ルネサンスの三大巨匠」『福岡日伊協会会報』vol.7（2022）、5頁
（講師）：「「スコットランド国立美術館　The Greats 美の巨匠たち」福岡日英協会・福岡日伊協会共催「美術セミナー」アクロス福岡、2022年9月21日

2022年度業績一覧

荒木　文果（受賞）：LXI Premio Daria Borghese（2022年5月7日）
白川　太郎：『西洋史学』第1回奨励賞・最優秀賞（日本西洋史学会）
原　基晶：「聖なる選挙のリアルポリティクス」『チェーザレ』第13巻、講談社、2022年、pp. 207-11
：「ダンテとスパゲッティ：「国家的思考」の外へ出るために」『文學界』第76巻3号、文芸春秋、2022年、pp. 252-53
：ウンベルト・エーコ「中世の美学」慶應義塾大学出版会について」『週刊読書人』、2023年1月20日
（講師）：「明治座タイアップ企画：「チェーザレとその時代」」（オンライン）：第三回「マキャヴェッリはチェーザレに何を見たのか」、日伊協会、2023年1月19日
：「マキャヴェッリと『君主論』ルネサンス期イタリアのダイナミック史」、NHK文化センター梅田、全三回、2023年1月18日から2月15日まで

A03 イエズス会班

●論文

石川　博樹：“Increase in Teff Consumption in Northern Ethiopia between the 16th and 18th Centuries and the Birth of Injera,” *African Study Monographs. Supplementary Issue*, vol. 61（2023）, pp. 7-40.
平岡　隆二：“The Discovery and Significance of *Sufera no nukigaki*（Selection on the Sphere）, a Jesuit Cosmology Textbook in Japanese Translation.” *Historia scientiarum* 32-2（accepted, 2023年3月刊行予定）.
（雑誌特集号編集）：Ryuji HIRAOKA ed. Special issue: East-West Contacts and Scientific Culture in Early Modern East Asia 2. *Historia scientiarum* 32-2（2023年3月刊行予定）
小俣ラポー日登美：「キャンセル・カルチャーの標的となる歴史概念」（『現代思想』2023年1月号　特集=知のフロンティア――今を読み解く23の知性――）
パトリック・シュウェマー：「キリシタン聖人伝の日欧の原典（上）」『キリシタン文化』159（2022）21-44頁
：「キリシタン聖人伝の日欧の原典（下）」『キリシタン文化』160（2022）1-19頁
：「北米英語圏における軍記・語り物の研究」『軍記と語り物』58（2022）1-19頁

●書籍

浅野ひとみ：「キリシタン信仰具　アグヌスデイ・ノミナ・苦行鞭」浅野ひとみ編著『覚醒する禁教期キリシタン文化』長崎純心大学、2023年、13-42頁
石川優生・浅野ひとみ・山下俊雄：「津久見市所蔵『読書する修道士のいる西洋風俗図』の彩色顔料について」浅野ひとみ編著『覚醒する禁教期キリシタン文化』長崎純心大学、2023年、173-180頁
平岡　隆二：「キリシタンと科学伝来−宣教師はなぜ西洋科学を紹介し、どのように受容されたのか」、岩城卓二ほか編『論点・日本史学』、ミネルヴァ書房 2022年8月、170-171頁
小俣ラポー日登美：『殉教の日本――近世ヨーロッパにおける宣教のレトリック』（名古屋大学出版会、2023年2月）
：「17-18世紀ヨーロッパにおける日本情報と日本のイメージ」（木畑洋一、安村直己編『岩波講座　世界歴史　第15巻　主権国家と革命　15-18世紀』岩波書店、2023年3月）
折井　善果（分担執筆）：Manuela Bragangnolo ed. *Legal Books and Beyond in the Iberian Worlds: Normative Knowledge Production in the Age of Printing Press.* Max Planck Studies in Global Legal History of the Iberian Worlds. Leiden: Brill, 2023（担当 “Pietro Alagona’s Compendium Manualis Navarri Published by the Jesuit Mission Press in Early Modern Japan”）印刷中
：『キリスト教文化事典』丸善出版、2022年（担当「キリシタン文学」）

●研究発表・講演

浅野ひとみ：「初期キリシタン時代の信仰具　苦行鞭について」ReMo研研究会、2022年12月27日
：「アルフォンソ賢王『聖母マリア賛歌集』に見る聖地巡礼」日本基督教学会九州支部大会、2023年3月24日
アンドレス・メナチェ：「17世紀の排耶書におけるキリシタン・キリスト教像について―雪窓宗崔を中心に―」京都大学基督教学会第28回学術大会、2022年7月16日
石川　博樹：「16 ～ 19世紀エチオピア北部における副食」、日本ナイル・エチオピア学会第31回学術大会、2022年4月27日
：「イタリアの人種論における「ハム人種」」、日本アフリカ学会第59回学術大会、2022年5月22日
：「エチオピアの栽培植物に関する歴史研究を通して見た学際的共同研究の可能性」、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所海外学術フォーラム、2022年6月25日
：「アフリカ食文化史研究の試み」、アフリカ史研究会第2回研究会、2022年9月3日
岡田　正彦：「近世の仏教暦と梵暦社中―僧侶の編暦・造暦・頒暦と近世社会―」日本宗教学会・第81回学術大会・パネル「近世近代における暦の流通と宗教文化」（愛知学院大学）、2022年9月10日
：「Buddhist Science in 19th Century and Modern Buddhism in Japan.」Interpreting Japan/Interpreting Buddhism（シカゴ大学東アジア研究センター・沼田財団共催学術会議）における研究発表（シカゴ大学）、2022年10月18日
折井　善果：『日本のキリスト教迫害下における信仰「偽装dissimulation」理論の神学的源泉』科学研究費基盤B、代表：大橋幸泰（早稲田大学）「キリシタンを通じて考える近世日本・東アジアの文化・思想・諸宗教」研究集会、2022 年 4 月 17 日、オンライン
：“The Theological Sources of the Theory of “Dissimulation” During the Period of Persecution of Christianity in Japan. International Symposium “Religion, Translation and Transnational Relations: Japan and（Counter-）Reformation Europe,” September 1–3, 2022. Leipzig University, Center for Advanced Studies in the Humanities and Social Sciences.
：“Mentoring Comments to the Dissertation of Javier Takamura, D. Phil.（Greene’s Tutorial College, UK）: “Luís Fróis's História de Japam: Aims and methods.” International Workshop: Historical Legacies of Christianity in East Asia. Co-sponsored by The Institute of Greco-Roman studies at the Institute of Humanities Seoul National University, South Korea& The Ricci Institute for Chinese-Western Cultural History, Boston College, USA, November 28—December 4, 2022. Seoul National University.
小俣ラポー日登美：「長崎26聖人の列福・列聖とヨーロッパの日本観――200年にわたる殉教の表彰――」招待。学会名：「バチカンと日本 100年プロジェクト」（角川文化振興財団主催、於 上智大学、2022年4月10日）
：“Martyrdom in the Japanese context: from the rejection of a foreign concept to the birth of an identity” 招待。学会名：International Conference, Ut Sanguis Martyrum sit semen Christianorum, Palacký University Olomouc（2022年6月1-2日オンライン開催）
：“Witness or be excommunicated? Jesuits converts and Dominicans Friars at the Apostolic Trial of Nagasaki.” 査読あり。学会名：Panel organized by Carla Tronu, The rivalry between Jesuits and mendicants about the early modern Japanese missions, the Asian Studies Conference Japan（ASCJ）、（2022年7月2-3日オンライン開催）
：「殉教の条件――長崎二十六聖人列福裁判資料の証言から――」（日文研共同研究会『西洋における日本観の形成と展開』共同研究会、於　国際日本文化研究センター、2022年10月30日）
：「ロヨラ・ザビエル・殉教者――初期イエズス会の聖性」（キリシタン文化学会大会、2022年12月3日オンライン開催）
：「歴史概念としての殉教を考える」（トランスキュルチュレーション研究会、2022年12月28日オンライン開催）
：「18世紀フランスの演劇の中の日本・韓国・中国――『悲劇・山伏』（1779）を読み解く」招待。学会名：韓国延世大学・成均館大学・東京大学東洋文化研究所・京都大学人文科学研究所合同シンポジウム「『脱境界』：移住、交渉、共生」（韓国延世大学, 2023年1月17日）

武田　和久：「イエズス会サンタ・ロサ布教区（現パラグアイ）洗礼簿（1754-1764）―受洗者の母親の所属カシカスゴに関する試論―」日本ラテンアメリカ学会代43回定期大会、同志社大学烏丸キャンパス、2022年6月5日
：「父親としての愛情／処罰のはざまで―イエズス会文書に表れる「鞭打ち」（アソーテ azote）を手掛かりに（パラグアイと日本、16-18世紀）―」科研基盤B「中近世キリスト教世界における「包摂する暴力」―迫害と寛容の二分法を超えて―」研究会、山梨大学甲府キャンパス、2022年9月11日
：「家父長主義的暴力と改宗―スペイン領アメリカにおけるイエズス会宣教を中心に―」キリスト教史学会第73回大会、南山大学（Zoomオンライン）、2022年9月12日
：「イエズス会の組織原理に関する試論―「もつれ」の視点から―」2022年度A03班第2回研究会、Zoomミーティング、2022年11月19日
：「もつれとは何か?」2022年度全体会議「ラテン・キリスト教と日本仏教における「もつれた修道制史」を目指して」ホテルリゾーピア熱海、2023年1月7日
：「「もつれ」から見るイエズス会組織原理（Formula of the Institute）と会憲（Constitutions）−イグナチオ・デ・ロヨラにまつわる歴史叙述とGeorge E. Gansの解説を踏まえて―」2022年度ReMo研全体会議「ラテン・キリスト教と日本仏教における「もつれた修道制史」を目指して」ホテルリゾーピア熱海、2023年1月7日
平岡　隆二：「イエズス会の日本語宇宙論教科書『スヘラの抜書』の発見とその意義」、日本科学史学会総会（オンライン）、2022年5月29日
：“The discovery and significance of *Sufera no nukigaki* (Selection on the sphere) , a Japanese translation of Jesuit cosmology textbook,” International Symposium ‘Religion, Translation and Transnational Relations: Japan and (Counter-) Reformation Europe,’ Lepzig University, September 2, 2022.
：「ワクチン伝来と近世長崎」、国立大学附置研究所・センター会議第3部会シンポジウム「感染症と近代社会：ポストパンデミックの人文学に向けて」、2022年10月28日
：“Greco-Roman Cosmology in Japan’s ‘Christian Century（1549-c.1650）’”、科研基盤B「日本における西洋古典受容に関する包括的・学際的な国際共同研究」報告会、2022年12月18日
：「イエズス会日本布教と宇宙論−新出写本『スヘラの抜書』を中心に−」、科研費学術変革B「中近世における宗教運動とメディア・世界認識・社会統合（ReMo研）」イエズス会班報告会、2022年12月20日

●短報・書評・アウトリーチなど

浅野ひとみ（海外研究者招聘）：「日本学術振興会外国人研究者招聘Didier Martens（ブリュッセル自由大学）「キリシタン美術の源流」　2022年9月13日から27日まで
石川　博樹（短報）：「一皿の料理が問いかけるもの：アフリカの主食用作物と歴史研究」、永原陽子編『岩波講座世界歴史18　アフリカ諸地域　～20世紀』、岩波書店、2022年10月28日、221–222頁
：「日本ナイル・エチオピア学会第31回学術大会最優秀発表賞受賞者エッセイ：16～19世紀エチオピア北部における副食」、『日本ナイル・エチオピア学会ニュースレター』30（1）（2022年12月26日）、3–4頁
（受賞）：日本ナイル・エチオピア学会第31回学術大会最優秀発表賞、2022年4月17日
武田　和久（自著紹介）：「*Indigenous Knowledge as a Resource: Transmission, Reception, and Interaction of Knowledge between the Americas and Europe, 1492-1800*」、『ラテンアメリカ・カリブ研究』第29号、2022年、57-59頁
（受賞）：James Alexander Robertson Prize for best article in *Hispanic American Historical Review* 2021 for “Tecnologías de la memoria: mapas y padrones en la configuración del territorio guaraní de las misiones”、2023年1月6日
平岡　隆二（受賞）：日本科学史学会論文賞、2022年5月
（書評）：「大島明秀著『蘭学の九州』」、『熊本日日新聞』、2022年7月10日

B01 日本中世寺社班

●論文

佐々木守俊（単著）：「新造された小仏像の像内納入について」『清泉女子大学紀要』70（2023）、17-36頁
：「浄瑠璃寺吉祥天立像の納入摺仏について」『パラゴーネ』10（2023）、印刷中
小林　　郁（単著）：「神宮御師橋村家資料における新出の中世道者売券について」『皇學館大学研究開発推進センター紀要』9（2023）、331-336頁
藤本　　誠（単著）：「『日本霊異記』の成立―日中の仏教説話集の編纂意識を手がかりとして―」、『仏教文学』47（2022）、41-52頁
：「古代地方寺院の性格と機能―地方豪族と住僧の検討を中心として―」、『史学』91（3）（2022）、1-36頁
：「『東大寺諷誦文稿』における孝子伝的記述の特質―抹消（擦消）の意味と史的背景をめぐって―」、『古代文学』62（2023）、印刷中

●書籍

苅米　一志（分担執筆）：「琵琶湖・淀川水系の中世漁撈について」橋本道範編『自然・生業・自然観　琵琶湖の地域環境史』小さ子社、2022年4月、227-255頁
（共著）：就実大学吉備地方文化研究所編『吉備地方中世古文書集成（4）美作豊楽寺文書』同研究所、2023年3月、「解説　美作豊楽寺の中世古文書」および全編の編集担当
服部　光真（分担執筆）：「四国遍路札所寺院としての近世浄瑠璃寺・浄土寺」愛媛県歴史文化博物館編『浄土寺・浄瑠璃寺と写し霊場』伊予鉄総合企画、2022年、130-133頁
鎌倉　佐保（共著）：鎌倉佐保・高木徳郎・木村茂光編『荘園研究の論点と展望―中世史を学ぶ人のために』、吉川弘文館、2022年
千枝　大志（分担執筆）：「十六～十七世紀伊勢神宮地域をめぐる信用と金融の実像」中島圭一編『日本の中世貨幣と東アジア』勉誠出版、2023年、296-328頁
藤本　　誠（分担執筆）：吉村武彦・川尻秋生・松木武彦編『シリーズ 地域と古代日本　東国と信越』、KADOKAWA、2022年（担当：「地方寺院と村堂」172-206頁）
守田　逸人（共著）：鎌倉佐保・高木徳郎・木村茂光編『荘園研究の論点と展望―中世史を学ぶ人のために』、吉川弘文館、2022年

●研究発表・講演

川崎　剛志：“Image-Building on Kumano Pilgrimage in Medieval Japan: Origin, History, and Geography” , International Medieval Congress 2022 Session318、リーズ大学、2022年7月4日
：「鎌倉中期の金剛山大規模修造と『金剛山縁起』―一ノ橋文庫蔵『金剛山勧進帳』（弘長二年、真祐自筆署名）をめぐって―」、仏教文学会大会シンポジウム「葛城二十八宿の仏教文学史的環境」金城学院大学、2022年9月4日
：「岡山の知識人との交遊と収書―正宗文庫塚本吉彦旧蔵書をめぐって―」、第2回正宗文庫セミナー（国文学研究資料館主催）基調講演、就実大学、2022年9月10日
佐々木守俊：「仏像の内部に納入された版画　人とほとけの世界を結ぶ仏教版画の世界」、清泉ラファエラ・アカデミア一日講座、2022年6月10日
小林　　郁：「伊勢御師の形成期における道者について」、地方史研究協議会準備報告会、オンライン、2022年8月
：「中世後期における伊勢御師の様相―道者売券を中心に―」、2022年度地方史研究協議会　第72回（三重）大会　“出入り”の地域史―求心・醸成・発信からみる三重―、2022年10月
：「御師の形成と発展」、伊勢郷土会、2022年10月
：「伊勢御師にみる“おもてなし”の歴史」、株式会社伊勢福「おかげ講習」、2022年11月
：「中近世文書を読む～中世道者売券について～」、皇學館大学研究開発推進センター史料編纂所古文書講座、2022年12月
：「神宮御師資料の現在地を紐解く　現状と課題～橋村家関係資料を例に～」、御師文化再生フォーラム、2023年3月
鎌倉　佐保：「平安・鎌倉時代の武蔵武士～多摩郡西部を本拠にした武士団　武蔵七党、横山党について～」、八王子市生涯学習センター南大沢分館2022年度市民自由講座、2022年5月7日
：「北条義時の生きた時代―「鎌倉殿の13人」の時代背景を探る―」、東京都立大学オープンユニバーシティ、2022年6月7日

2022年度業績一覧

千枝　大志：「伊勢御師の名古屋での空間認識を体験！檀家帳と古地図で解き明かす江戸期の檀家探索ツアー【高岳・主税町・橦木町編】～伊勢信仰を広めた伊勢御師必携の歴史資料を使った史料活用講座～」、大ナゴヤツアーズ　於名古屋市　2022年5月22日
：Yamada Hagaki（山田羽書）: An Investigation of Japan's Oldest Private Paper Currency a numismatic study of Japan's oldest private paper currency in the Tokugawa period（準備報告）、「貨幣再考」研究会@飛騨高山研究集会、於飛騨地域地場産業振興センター 3階会議室、2022年8月11日
：「近世伊勢山田における紙幣の存在形態と流通様相―山田羽書の発行構造と諸藩札の関係をめぐって―」、第72回2022年度地方史研究協議会（三重）大会共通論題報告プレ報告会、於ZOOM、2022年9月4日
：Yamada Hagaki（山田羽書）: An Investigation of Japan's Oldest Private Paper Currency a numismatic study of Japan's oldest private paper currency in the Tokugawa period、INC（国際貨幣学会議）2022ワルシャワ大会、於ワルシャワ大学、2022年9月16日
：「近世伊勢山田における紙幣の存在形態と流通様相―山田羽書の発行構造と諸藩札の関係をめぐって―」、第72回2022年度地方史研究協議会（三重）大会共通論題報告、於三重県総合文化センター内男女共同参画センター「フレンテみえ」多目的ホール、2022年10月16日
：「実学としての宗教史学の追求の可能性 - 歴史まちづくりとSDGs的史料保存 - 」、同朋大学人生を考える講座、於名古屋市（同朋大学知文会館）、2022年11月1日
：「東海三県の参詣曼荼羅をめぐる諸問題：伊勢と熱田の参詣曼荼羅を中心に」、第1回中近世伊勢社会経済史研究会 伊勢参詣曼荼羅からみた伊勢神宮地域の中近世都市社会像再考、於伊勢河崎商人館角吾座ホール、2022年11月13日
：「江戸・明治から変わらない街並み、区画、一部土地所有者まで!?史料で読み解く土地深堀歴史学ツアー【那古野編】～江戸や明治の時代の面影が残っているのは、替地町という忘れられた旧町名に理由があった!?～」、大ナゴヤツアーズ　於名古屋市、2022年12月11日
：「羽書と呼ばれた近世紙幣と伊勢・松坂」、松阪歴史文化舎第6回松阪学入門講座、於三重県（松阪市立図書館2階講座室）、2022年12月25日
：「実例で学ぶ！歴史資料を読み解き、楽しむ方法」、TSUTAYA BOOKSTORE名鉄百貨店、於名古屋市（TSUTAYA BOOKSTORE名鉄百貨店本館）、2023年2月5日　＊川口淳氏・永田孝氏との共同
：「伊勢参詣曼荼羅をよみとく―画像解釈と縁起・伝承―」、令和4年度歴史講座「くらしと伝承」第3回、於三重県（斎宮歴史博物館）、2023年2月18日

藤本　　誠：「古代日本の地方寺院の性格と機能―地方豪族と住僧の検討を中心として―」2022年7月29日、ReMo研・日本中世寺社班研究会主催研究会（オンライン開催）
：「古代日本の「孝子」受容と地域社会の法会―『東大寺諷誦文稿』を中心として―」2022年8月20日、古代文学会2022年度夏期セミナー（オンライン開催）

守田　逸人：「中世善通寺領の史実と伝承をあるく」日本地理学会大会公開講演会、2022年9月

湯浅　治久：「中世武士団の統治と宗教」、「中近世における宗教運動とメディア・世界認識・社会統合：歴史研究」日本中世寺社班研究報告、2022年6月26日、オンライン
：「日本中世の「旅と移動」研究の新段階―人流・物流・宿の実像―」、2022年度専修大学高校教員研修プログラム・日本史、2022年8月2日
：「原泉地区の中世の村々と生業―孕石氏の来歴と中世の原泉地区（その2）―」、原の会、2022年8月20日
：「地下文書の生成・変容と権力秩序―近世地方文書への道程―」、中世地下文書研究会シンポジウム、2022年10月22日
：「都鄙間における「公用関」と在地領主の関所支配について」『論集　東海道中世史研究』研究会、2022年11月23日、オンライン

●短報・書評・アウトリーチなど

苅米　一志（単著）：「書評　赤澤春彦編『新陰陽道叢書　第2巻　中世』」、『日本史研究』718（2022）、81-88頁

川崎　剛志（単著）：「役行者の熊野参詣」、『国立能楽堂』466（2022）、32-35頁

小林　　郁（新聞記事・取材協力）：「神宮大麻全国頒布百五十周年に寄せて　伊勢の関連地をめぐる」、『神社新報』暑中特別号（2022）
（新聞記事）：「史料が語る伊勢信仰」、『神社新報』3598（2022）
：「明治の神宮改革と御師」、『神社新報』3610（2022）

上野　　進：「中世の讃岐―武士の誕生と讃岐の人びと―」（『郷土博通信』№19、公益財団法人鎌田共済会郷土博物館、2022年4月）、4頁-6頁

藤本　　誠（単著）：「〔Book Review〕小林敏男著『邪馬台国再考―女王国・邪馬台国・ヤマト政権』」、『大東文化新聞』（4月号）（2022）
（書評）：「小林崇仁著『日本古代の仏教者と山林修行』」、『説話文学研究』57（2022）、246-249頁

湯浅　治久：「孕石氏の来歴と中世の原泉地域」『原の会　会報』2（2022）

学術変革領域研究（B）2020 ～ 2022年度
「中近世における宗教運動とメディア・世界認識・社会統合」

ReMo研　ニューズレター　第2号

2023年3月　発行

発行人　大貫 俊夫
発行所　東京都立大学人文社会学部
〒192-0397　東京都八王子市南大沢1-1
TEL : 042-677-2109
E-mail : ohnuki@tmu.ac.jp

領域ホームページ
https://religious-movements.com/